

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520627

研究課題名（和文） 近代アメリカにおける記憶・シンボル・記念碑

研究課題名（英文） Memory, Symbols and Monuments in Early America

研究代表者

和田 光弘 (MITSUHIRO WADA)

名古屋大学大学院・文学研究科・教授

研究者番号：10220964

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、アメリカ史研究の最先端のテーマである「記憶」や「シンボル」等を分析の俎上に載せ、近代アメリカの形成過程においてこれら「ソフトな装置」がいかにかに形作られ、機能したのか、その背後に潜むメカニズムの一端を、種々の対象（ポカホンタス像、ワシントンの家族墓所、独立戦争史跡、貨幣の銘文、ブラックフェイス・ミンストレル、奴隷墓地等）の考察を通じて、歴史的に明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：Collective memories, icons, representations, and symbols are now focused in the recent scholarship of American history. In this project we shed light on how these “soft devices” were formed and functioned in Early American history, examining the historical backgrounds of the Statue of Pocahontas, the Washington Family Burial Grounds, the sites related to the Revolutionary War, inscriptions of coins, blackface minstrelsy, and the African Burial Ground National Monument.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：アメリカ史、記憶、シンボル、記念碑、ワシントン、貨幣、ブラックフェイス・ミンストレル、奴隷墓地

1. 研究開始当初の背景

（1）近年、アメリカ史においても、いわゆる国民化論、ナショナル・アイデンティティに関する議論が広がりを見せ、公的記憶（公共の記憶、パブリック・メモリー）やシンボル操作など、「伝統の創出」に係わるメカニ

ズムが分析の俎上に載せられつつある。記念碑や記念日といった記念・顕彰行為（コメモレイション）も伝統を創出するための重要な社会的装置であり、アメリカ史研究者の関心を集め始めたのも故なしとしない。それらは公的記憶の結節点・表出点であると同時に、

公的記憶を再生産・変容させる仕組みともいえる。したがってたとえば記念碑などを一種の史料と捉え、ある特定の歴史事象に対する人々の意識の変化、記憶の形成過程を広く読み解くことも可能となる。このように本研究では、わが国のアメリカ史研究において最近注目されるに至った最先端のテーマを取り上げ、その分析のために従来の史料概念には必ずしも当てはまらない資料に注目するなど、テーマ、手法の斬新性・先端性に特徴がある。

(2) ナショナル・アイデンティティに関連する記憶やシンボルの研究は、アメリカ本国において現在急速に進展しつつある。また、記念碑を俎上に載せた研究も優れたものが現れており、ケネス・E・フット『記念碑の語るアメリカ』(名大出版会)はその代表的な著作といえる。この研究書については、2002年に今回申請の3名を中心に翻訳・上梓したが、『朝日新聞』の「天声人語」(2004年7月6日)を始め、新聞(毎日新聞、中日新聞、日経新聞、産経新聞、読売新聞)・雑誌(中央公論、建築文化)・テレビ(週間ブックレビュー、2003年1月19日)の書評等において取り上げられるなど、大きな反響を呼び、この問題系について、わが国における関心の高さが証明された。しかしながらわが国のアカデミズムにおいては、このテーマに係るアメリカ史研究は、いまだ十全とは言えない。他方、イギリス史やフランス史の分野では、当該テーマの研究は比較的早くから進展し、わが国においてもキャッチアップが進んでいる。したがって本研究は、このようなアメリカ史研究の内外差を埋めるために必要であると考えられる。これまで研究代表者の和田は、関連する専門論文の執筆のほか、アメリカ学会2004年度年次大会のシンポジウム報告、歴史家協会2004年度大会講演、第18回愛知県世界史教育研究会講演、名古屋市立高等学校社会科学研究会総会記念講演などにおいて、当該テーマに基づく研究報告や講演をおこない、積極的にその重要性を広く発信してきたが、本プロジェクトの共同研究によって、一層の進展、充実を図りたいと考えた。

(3) 本研究に参加する研究者それぞれの科学研究費に基づくプロジェクト研究からは、すでに多数の論文やいくつかの著作などが研究成果としてまとめられており、とりわけ、和田光弘が研究分担者として加わった共同研究「近代化プロセスにおける家族と郷土の比較文化史」(科学研究費基盤研究B2、平成12～15年度、代表・若尾祐司)の終了に際し、まとめられた研究報告書は、当該研究分野における到達点を示すものといえる。また、その研究成果をさらに発展させたかたちで、若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文

化史—郷土史・史蹟・記念碑』(名古屋大学出版会、2005年)が刊行された。そこには和田のほか、久田由佳子も寄稿している。このように、共同研究「近代化プロセスにおける家族と郷土の比較文化史」において和田が担当した研究テーマは、今回申請する研究のスプリングボードとなっており、そこで得られた知見をさらに発展・展開すべく、本研究の立ち上げが構想・企画された。

2. 研究の目的

(1) 本研究はアメリカ史研究の最先端のテーマである「記憶」、「シンボル」、「記念碑」等を分析の俎上に載せ、近代アメリカの形成過程においてこれら「ソフトな装置」がいかに形作られ、機能したのか、そしてその装置が何故今日においてなお、アメリカ合衆国の国民統合に重要な役割を果たし、機能し続けるのか、その背後に潜むメカニズムを17～19世紀に焦点を絞ることによって歴史的に解明しようとするものである。具体的には、記念碑による革命・建国の記憶の形成、星条旗や貨幣の意匠等、合衆国のシンボル形成およびその影響についての分析、ジョージ・ワシントンやボカホントス等、「英雄」にまつわる「建国神話」の成立過程、劇場等、諸メディアによる帰属意識の形成など、アメリカのナショナル・アイデンティティを構成する諸側面を可能な限り取り上げてゆきたい。

(2) 本研究は、時代的には上記のとおり18・19世紀、地域的にはアメリカ合衆国の北部から南部までを対象としており、時代・地域ともにアメリカ史の範囲を幅広くカバーするため、和田光弘が18世紀・南部、森脇由美子が19世紀・中部(ニューヨーク)、久田由佳子が18世紀末から19世紀前半・北部(ニューイングランド)を担当し、時間軸・空間軸における多様性を確保している。

3. 研究の方法

(1) 初年度(平成19年度)は、メンバーそれぞれの担当する地域・時代の研究課題を出発点として、本研究のテーマにアプローチする。和田光弘は、18世紀南部における記念碑とシンボル、なかでも最も重要なシンボルであるワシントンのイメージや家族墓所(ヴァージニア州)などの調査に基づきつつ、基礎的な史実・データの収集・分析にあたり、さらに関連する啓蒙的著述や翻訳などを行う。森脇由美子は、19世紀ニューヨークにおけるシンボルと劇場文化を個人テーマに掲げ、劇場という都市のシンボリックな空間の分析を通じて、階級的な記憶の形成や、ナショナル・アイデンティティの生成の具体相を探る。久田由佳子は、建国期ニューイングランドに

おける革命の記憶とシンボルをテーマとして、とりわけセイラムを中心に建国の公的記憶の成立過程に注目し、記念碑等に関する実地調査を実施するとともに、ハーヴァード大学等において地方史史料を鋭意収集する。各自の研究成果の検討は和田を中心に随時おこない、相互の連絡を緊密に保つ。また、「ヨーロッパ『歴史の場』に関する研究」（基盤研究B、代表・若尾祐司）との共催で、研究会を開催する。主要設備に関しては、初年度ということもあり、研究を進める上で必要不可欠な各種史資料・文献など、必要な関連図書を整備を急ぐ。具体的には、南部植民地関連図書、19世紀ニューヨーク市史関係図書、建国期ニューイングランド地域史関係図書等の購入整備を行い、従来の文献収集の蓄積の上にさらにこれらを加えることで、研究環境をととのえる。

(2) 平成20年度は、各自のテーマに添いつつ研究を深化させ、可能な限り複数の関連主題にアプローチする。和田光弘は南部の記念碑について引き続き研究を進めるとともに、大陸紙幣や硬貨などの意匠の分析を通じて、アメリカのイメージ形成のダイナミズムを考察する。さらに新旧両大陸をまたにかけたポカホンタス神話の形成過程の解明のため、イギリスのグレーヴゼンド等において調査を行う。森脇由美子は19世紀のニューヨークを中心に、ナショナル・アイデンティティを構成する種々の装置（劇場など）に注目し、その成立過程の分析を進める一方、イギリスとの比較のため、ロンドンにおいて資料収集を行う。久田由佳子は、植民地時代から建国期のニューイングランドやニューヨークを対象として、職人の世界や奴隷墓地の記憶のあり方について、社会史のアプローチからその具体相を析出する。各自の研究成果の検討は和田を中心に随時おこない、相互の連絡を緊密に保つ。また、「ヨーロッパ『歴史の場』に関する研究」との共催で、研究会を開催する。主要設備として、研究を進める上で必要不可欠な各種史資料・文献など、必要な関連図書の整備も引き続き行う。

(3) プロジェクトの最終年度（平成21年度）は、各自のテーマに添いつつ研究を深化させるとともに、報告書の作成に向けて研究の総括をおこなう。具体的なテーマとして、和田光弘は南部の記念碑について引き続き研究を進めるとともに、大陸紙幣や硬貨などの意匠の分析を通じて、アメリカのイメージ形成のダイナミズムを考察する。森脇由美子は19世紀のニューヨークを中心に、劇場など、ナショナル・アイデンティティを構成する種々の装置に注目し、その成立を分析する。久田由佳子は、18世紀末から19世紀初頭のニューイングランドを引き続き対象として、ローカル・アイデンティティとナショナル・

アイデンティティとの相克を社会史・家族史的なアプローチも加味しつつ考察し、たとえば職人の世界の分析を通じてその具体相を析出する。本研究プロジェクトの成果の一環として、若尾祐司・和田光弘編著『歴史の場—史跡・記念碑・記憶』（ミネルヴァ書房）が刊行予定であり、そこには研究代表者の和田および連携研究者の久田が著した論文が収録されているが、さらに本プロジェクト独自の成果報告書の作成に向けて、研究代表者・連携研究者の総力を結集する。

4. 研究成果

(1) 各メンバーは、それぞれのテーマに添いつつ研究を深化させ、可能な限り複数の関連主題にアプローチして成果を上げた。研究代表者の和田光弘は、18世紀南部における記念碑とシンボル、なかでも最も重要なシンボルであるワシントンのイメージや家族墓所（ヴァージニア州）などの調査に基づきつつ、基礎的な史実・データの収集・分析にあたり、さらに関連する啓蒙的著述や翻訳などをおこなうとともに、大陸紙幣や硬貨などの意匠の分析を通じて、アメリカのイメージ形成のダイナミズムを考察した。さらに新旧両大陸をまたにかけたポカホンタス神話の形成過程の解明のため、イギリスのグレーヴゼンド等において調査を実施した。連携研究者の森脇由美子は、19世紀ニューヨークにおけるシンボルと劇場文化を俎上に載せ、劇場という都市のシンボリックな空間の分析や、そこで演じられたブラックフェイス・ミンストレルの考察を通じて、階級的な記憶の形成や、ナショナル・アイデンティティの生成の具体相を探る一方、イギリスとの比較のため、ロンドンにおいて資料収集をおこなった。連携研究者の久田由佳子は、建国期ニューイングランドにおける革命の記憶とシンボルをテーマとして、とりわけセイラムを中心に建国の公的記憶の成立過程に注目し、記念碑等に関する実地調査を実施するとともに、ハーヴァード大学等において地方史史料を鋭意収集した。さらに、植民地時代から建国期のニューイングランドやニューヨークを対象として、職人の世界や奴隷墓地の記憶のあり方について、社会史のアプローチからその具体相を析出した。

(2) 上記のテーマに関して、メンバーは論文執筆や学会発表等を積極的におこなっているが、本研究プロジェクトの成果の一環として、若尾祐司・和田光弘編著『歴史の場—史跡・記念碑・記憶』（ミネルヴァ書房）が近々刊行予定であり、そこには研究代表者の和田および連携研究者の久田が著した論文が収録されている。さらに研究代表者・連携研究者・研究協力者の総力を結集し、本プロ

プロジェクト独自の成果報告書(冊子)を作成した。また、同時期に行われたプロジェクト、「ヨーロッパ『歴史の場』に関する研究」(基盤研究(B)、代表・若尾祐司)とも緊密に連携を図り、両科研のジョイント・プロジェクトの形で計9回、研究会を重ねた。このように、本プロジェクトの多方面にわたる研究活動により、アメリカ史研究の最先端のテーマである「記憶」や「シンボル」に関して、わが国における研究水準が一定の上昇を見たと自負している。本プロジェクトを基盤として、さらなる共同研究の展開をはかることによって、当該テーマの一層の深化が可能になると確信するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

① 久田由佳子「市場革命の時代における女工たちの労働運動—マサチューセッツ州ローウェルを中心に」(『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』42号、2010年) 査読無、31-50.

② 和田光弘「世界史のなかのタバコと反タバコ」(『モダン・フィジシャン』Vol. 29, No. 12、新興医学出版社、2009年) 査読無、1683-1686.

③ 森脇由美子「アメリカにおけるヒーロー像と労働者階級—19世紀中葉のニューヨークを中心に」(『人文論叢(三重大学人文学部文化学科紀要)』26号、2009年) 査読無、133-143.

④ 和田光弘「ジョージ・ワシントンの『帝国』—独立革命期における『帝国』の語の使用に関する一考察」(『名古屋大学文学部研究論集』161号、2008年) 査読無、129-151.

⑤ 森脇由美子「ブラックフェイス・ミンストレルと労働者階級—19世紀前半ニューヨークにおける階級と人種」(『立命館文学』604号、2008年) 査読有、684-693.

⑥ 森脇由美子「19世紀のアメリカ史」(『歴史と地理』216号、2008年) 査読無、38-41.

[学会発表](計8件)

① 和田光弘 名古屋大学文学部・文学研究科公開シンポジウム「貨幣が語る世界史」[報告](於・名古屋大学、2010年3月6日)

② 森脇由美子 関西アメリカ史研究会・第47回年次大会[報告](於・キャンパスプラザ京都、2009年11月15日)

③ 森脇由美子 日本英文学会中部支部・第61回年次大会[シンポジウム報告](於・愛知学院大学、2009年10月17日)

④ 和田光弘 国際シンポジウム「太平洋地域における日本人の国際移動」[セッション

2・コメンテーター](於・立命館大学、2009年10月10日)

⑤ 和田光弘 日本アメリカ史学会・第6回[通算34回]年次大会[シンポジウム報告・大会主催](於・名古屋大学、2009年9月20日)

⑥ 森脇由美子 日本アメリカ史学会・第6回[通算34回]年次大会[シンポジウム司会](於・名古屋大学、2009年9月20日)

⑦ 久田由佳子 アメリカ学会・第43回年次大会[自由論題B・司会](於・津田塾大学、2009年6月6日)

⑧ 和田光弘 愛知県立高校地歴科公民科教員・日曜会・平成19年度前期[講演](於・ルブラ王山、2007年6月30日)

[図書](計9件)

① 和田光弘「第1章 眠れぬ死者—ポカホンタス・ヨークタウン・ワシントン」(若尾祐司・和田光弘編『歴史の場—史跡・記念碑・記憶』ミネルヴァ書房、近刊) 3-19.

② 久田由佳子「第2章 奴隷制の記憶とニューヨーク—ローマンハッタンのアフリカ人墓地保存問題」(若尾祐司・和田光弘編『歴史の場—史跡・記念碑・記憶』ミネルヴァ書房、近刊) 21-41.

③ 久田由佳子「第4章 市場革命と女性」(有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史入門』青木書店、2010年) 69-86.

④ 和田光弘「第1部 第1章 植民地時代—17世紀初頭~1760年代」(有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』山川出版社、2009年) 29-46.

⑤ 和田光弘「第9章 記念碑が創る独立戦争の記憶」(入子文子・林以知郎編『独立の時代—アメリカ古典文学は語る』世界思想社、2009年) 215-234.

⑥ 森脇由美子「アメリカにおける自然観—ウィルダネスから自然保護へ」(片倉望編『自然の探究』三重大学出版会、2009年) 31-44.

⑦ 和田光弘「第2章 第2節 イギリス領北米植民地社会の形成(史料59~史料64)」(歴史学研究会編『世界史史料(第7巻)南北アメリカ 先住民の世界から19世紀まで』岩波書店、2008年) 120-128.

⑧ 和田光弘・森丈夫訳、バーナード・ベイリン著『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年、総頁数218頁.

⑨ 和田光弘「タバコ」(加藤友康編『歴史学事典(第14巻)ものゝわざ』弘文堂、2007年) 366-367.

[その他]

ホームページ等

http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~seiyoshi/page_wada.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 光弘 (MITSUHIRO WADA)
名古屋大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：10220964

(2) 研究分担者

森脇 由美子 (YUMIKO MORIWAKI)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：10314105
(H20 年度より連携研究者)

久田 由佳子 (YUKAKO HISADA)
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40300131
(H20 年度より連携研究者)